【特別企画】

1980年代再考 第二回

カタログ・サヨク・見栄講座

大澤真幸 × 斎藤美奈子 × 成田龍一

Special Talk: Osawa Masachi × Saito Minako × Narita Ryuichi
Photo: Uemura Akihiko (p531,p534), Kobayashi Kisei (p539)

日本社会の分岐点、1980年代。そこでは何かが終わり、何かが始まった。

左翼がサヨクになり、小説も思想もカタログ化、ユーミンが流れ、パルコの街が生まれ——。

戦後とポスト戦後のはざまで、いったい何が起きていたのか。社会学者、文芸評論家、歴史学者がいま改めて問い直す。

なぜ80年代か？

成田　このところ「戦後」が大きな議論になっています。今の首相は「戦後レジームからの脱却」ということを言っていますが、1945年からこっち、ずっと同じ流れ、同じ勢い、同じ重みで戦後というものがあったわけではありません。思想の文脈でいえば、「戦後思想」と言われてきたものがどこかでリアリティを失っていきます。そのような変わり目として1980年代に焦点を当て、80年代を介して「戦後」を再考する試みをしてみたいと思います。

そもそも1980年代は、ノスタルジーの対象としてこそ語られることはあったものの、時代像として正面から検討されて来たことはほとんどありません。歴史として論ずるには近すぎ、どの出来事に焦点を当てるか、定まっていないことが大きな理由でしょう。しかし、80年代は「戦後思想」と〈いま〉とを結ぶ分水嶺をなしています。いってみれば、戦後と戦後後とを、ともに視野に収めることができる地点です。80年代の思想は

「戦後思想」との格闘のなかから出てきたこともあきらかになるでしょう。また、いまや自明とされることがらも、多くここから出立しています。言語論的転回の影響がひろまり、これまで自明であった認識・作法が一変したのが80年代です。新自由主義も、このとき出発しています。

このことは、その後の節目――1990年前後、1995年、2001年、2011年などの意味を、（「戦後思想」からではなく）あらたにすることが可能となると思われます。

きっかけとして、具体的な著作を挙げることから始めてみましょう。「戦後思想」が「生産」と「社会運動」に力点を置いていたことを考えるとき、時代の変わり目として象徴的なのは、『消費』に徹底した、田中康夫『なんとなく、クリスタル』（1980年）の登場です。私の専門の歴史学をはじめ、それまでさまざまな領域の存立基盤であったマルクス主義的な考え方では、資本主義社会に対して批判的に向き合うことが大きな構えだったときに、この『なんとなく、クリスタル』は、消費の観点を打ち出すとともに、資本主義社会を肯定してみせました。資本主義的な文化の展開を、こんなものがあるぞ、あんなこともあるぞとカタログ的に示していく小説であり、かつ、それまでの小説が持っていた社会批判の構えとは異なり、自分たちの持っている欲望を肯定していきます。あっと驚く世界と主張を提示してみせました。

もうひとつ注目したい著作が、「社会運動」の変容に反応した、磯田光一『左翼がサヨクになるとき』（1986年）です。いま言った社会の把握とパラレルになっています。それまで資本主義社会に対してなんらかの批判的立場をとるのが「左翼」でしたが、そのような対抗的なスタイルは「サヨク」として相対化されてしまった、いろいろある考え方のひとつにされてしまったということを読み解く評論です。

それぞれ、日本社会が近代から現代に変わったことを指摘したと言ってもいいですね。付言すれば、「現代」思想という言い方が定着していくのもこの頃です。マルクス主義という戦後を代表してきた知のあり方から、新しいポストモダンの思想に主役が交代していく。その、言わばカタログが『別冊宝島　わかりたいあなたのための現代思想・入門』（1984年）という本だと思います。フーコー、ドゥルーズ、デリダという思想家たちがいったいどういう思想を唱えているのか、マッピングがなされている。日本編（1986年）も作られて、吉本隆明や山口昌男、中沢新一や浅田彰がどういうことを考えているかという全容がわかるようになっている。こうした紹介の仕方自体がとても80年代的だと思います。

それまでは、わかってもわからなくても、ともかく原典を「しこしこ」（これは、70年代的な語彙ですね）読んだのですが、パッと全貌をカタログ的に見せ、紹介する書物が出てくるようになる。これは知のあり方の大きな転換であった、と思います。

斎藤　『なんとなく、クリスタル』ですけれど、それは今だから言えることで、80年に出たときにはケチョンケチョンだったんです。成田さんもたぶんその頃は評価していらっしゃらなかったと思います（笑）。田中康夫さんはこの作品で、河出書房新社の文藝賞を獲ってデビューなさるんですけれども、こんなブランド名の集積のようなものの、どこが小説か、と。現在出ている河出文庫版の『なんクリ』には、高橋源一郎さんの解説がついていますが、そこで高橋さんは『なんクリ』は『資本論』だといっている。作品の意図を理解されるまでには長い時間が必要だったのです。

大澤　江藤淳だけが絶賛したんですよね。

斎藤　はい。それから、『左翼が

サヨクになるとき』は私もとても印象的に覚えている本です。磯田さんは文芸評論家ですが、歴史学だけでなく文芸評論も今からは信じられないくらいに左翼だったんですね、そもそもが。マルクス主義的なものと二人三脚だったんです。この本は「左翼」は中野重治から扱っていて、「サヨク」のほうは島田雅彦さんが『優しいサヨクのための嬉遊曲』を二二歳くらいで書いて、1983年に華々しい学生デビューを飾った。それを受けて、もっと上の世代の磯田さんが、「もう左翼は終わるなあ」という感じをお書きになったわけですね。

成田　そうですね。

斎藤　私自身の80年代に照らし合せていくつかの本を選んでみますと……『ANO・ANO（アノアノ）』（1980年）って知ってる人いますかね？　きっといないでしょうし、今ではなかなか古書店でもないです。『アンアン』『ノンノ』をある意味相対化しているわけですね。これは雑誌『宝島』に連載していたものをまとめた本なんですけれども、著者の下森真澄さんと宮村裕子さんは現役の女子大生でした。やがて来る女子大生ブームはみんなここから始まったと私は思っています。

80年代は女性の書き手がとても華々しく活躍した時代で、林真理子さんが『ルンルンを買っておうちに帰ろう』でデビューしたのが82年。上野千鶴子さんが『セクシィ・ギャルの大研究』でデビューしたのも82年ですね。で、『ANO・ANO』ですが、私はこれがぜんぶ先鞭をつけたと思っているんですよ。この頃はフェミニズムという言葉もジェンダーという言葉もなかったんですけれども、女性の生き方の根本的な問い直しが70年代を通じて――ウーマン・リブが1970年前後から始まって、女性たちの性をめぐるアンケートをまとめた「モア・リポート」なんていうのがあったりとか――一〇年ぐらいかけてあったんですけれども、それをぜんぶ飛び越えちゃったのがこの本です。マスターベーションがどうしたとか初めてのセックスはこうだったとか、女子大生の赤裸々な日々が綴られていて、今だったら過激でもなんでもないけれど、それを当時の普通の女子大生がこうやって書いたのはすごいことなんです。三〇万部以上売れたのでそれなりにベストセラーだったと思うんですけれども、ここでなんか女性の新たな地平が拓けたっていう感じがしますね。上野さんたちの学問的な理論づけとはまったく別の回路で、でも同じ次元から出てきた。

それから『ミーハーのための見栄講座』（1983年）。80年代をよくご存じの方は「知ってる、知ってる」ってなるんですが、80年代は広告代理店文化の時代ですから、電通・博報堂のクリエイターが文化を作っていくと――まちがった思い込みなんですけど――思われていたわけです。これはホイチョイ・プロダクションというクリエイター集団の本です。彼らは成蹊学園の附属中高から大学までいっしょだった同級生グループで、安倍総理の同級生でもあります。総理はここには入れなかった口だなと私は思うんですけど（笑）、この人たちはのちに『私をスキーに連れてって』（1987年）、『彼女が水着にきがえたら』（1989年）といったヒット映画を手掛けます。

で、『見栄講座』とは何か。「今日の若者のライフ・スタイルに於いて、『自分がどうあるべきか』などと言う問題は、さして大きな意味を持ちません。重要なのは他人からどう見られるかです」。これだけをコンセプトにして、どうやって見栄を張るか、どうやったらかっこ良く見えるかということをやっていくんですけど、見栄テニス、見栄スキー、見栄フランス料理、見栄海外旅行、見栄オートバイ、見栄キャリアウーマン、見栄軽井沢、見栄湘南、見栄シティ・ボーイと説いていきます。著者た

ちは中産階級の男の子ですよね。半分ぐらい本当にまじめに書いてあるのですが、途中からもう無茶苦茶な嘘八百を書いていくんです。私の知り合いではこれを信じていた人がいっぱいおりました（笑）。昔の若者はさ、努力家だったんだよね。もてるためにですよ、テニスをやる、スキーをやる、オートバイに乗る……たいへんなわけです。へたっぴいだと女の子にもてないじゃん。だからこっそり裏で練習しなければならない。道具も買わなきゃいけない。そのためにバイトもしなければいけない。見栄とか言ってるけどたいへんなものですよ、このエネルギー。もてたいっていうだけで。

ここでの主題はなんでしょう。そもそも見栄って、ギャラリーがいないと成立しないじゃない？

つまり人間関係が大事だったの、この頃はまだ。面白いことは家の外にしかなかったんです。刺激的なことも人との出会いにしかなかった。だからこうやって一所懸命お金を貯め、練習をし、痛い思いをし、ってやったわけですね。いっぽうで、ファミコンが生まれるのが同じ83年ですよね。その頃は若者が買える電子機器って、もちろん携帯なんかないわけで、せいぜいウォークマンくらい。ウォークマンも外に出ていくための道具ですからね。けれども、このあたりからだんだんインドア化が進んでいく。85年くらいまではアクティブに外に出ていった若者たちがどんどん一人でなんでもできるようになっていってしまうわけですよね。

そして、ついでに『金魂巻』（1984年）。これは職業案内ですけれども、㊎／㊀というやつですね。当時の流行りの職業の、お金持ちパターンはこう、貧乏パターンはこうっていうのを図解しているんです。私はその頃貧乏ライターでしたから、ほんとそっくりそのままなんです。貧乏イラストレーター、貧乏カメラマン、みんな知ってましたけど、ほんとにこうだったですね。ものすごいよく取材している。今でこそ格差社会とか言ってるけれど、この頃はまだ㊎／㊀を遊べたわけですね。

1980年代は「戦後思想」と〈いま〉とを結ぶ分水嶺をなしています。いってみれば、戦後と戦後後とを、ともに視野に収めることができる地点です。（成田）

理想なき時代

大澤　私が思うに、80年代って、蜃気楼のような時代というか、本当にあったのかなかったのかよくわからないみたいな感じがするわけ。よく「失われた一〇年」と1990年代のことを指して言いますよね。なぜ90年代が失われて見えるかというと80年代を基準に考えるからですよね。80年代がしっかり存在していたとすれば90年代はないに等しいと思うわけでしょう。逆に言えば、90年代が存在したならば、80年代はなかったということですよね。私はこの図と地を反転させた逆の見方の方が正しいような気がします。本当に存在している感じがするのはむしろ90年代以降で、80年代というのは本当にあったのか、いや、確かにあったはずだが、よく見るとない、そんな感じがする。さらに言うと、90年代が失われた一〇年で、そのあとがきちんと「存在する」かというと、その後、2000年代の最初の一〇年も含めて、失われた二〇年となって、何だか、失われたXX年がどんどん増えていきそうな勢いじゃないですか。どうして、そうなってしまうかというと、存在しない一〇年間を基準に考えているからなんですね。では、逆に遡って70年代までの時代と比べたらどうなのか。それでも、80年代には、何か不思議な浮遊感があるのです。

70年代との関連でいうと、たとえば、庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』（1969年）という作品がありましたね。庄司薫という本人の筆名と同じ名前の主人公が出てきて、東京大学が紛争によって受験できなくなったときの日比谷高校の高校生という設定の小説です。実際の筆者は、もう少しさらに年上ですが。ともあれ、この小説は、1970年前後の時代の転換をある意味で象徴していました。その後、『さよなら快傑黒頭巾』（1969年）、『白鳥の歌なんか聞えない』（1971年）、『ぼくの大好きな青髭』（1977年）という四部作を書くわけです。ぜんぶタイトルに色がついています。本当は一年間で四冊書き上げる予定だったそうですが、ずっと延びて、四冊目が出た頃には70年代も終わりかけていた。庄司薫という人は、当時、非常に広く読まれた作家で、いわば早熟の秀才でしたが、この色の四部作の後は、ほとんど書いていなくて、現在は、公的にはほとんど沈黙しているような状況ですね。

庄司薫の、この一連の作品はある意味で70年代の終わりと80年代の予兆を併せ持っていると思うのです。まず文体ですよね。スラングみたいな、若者の雑談みたいな感じで書いているんですが、当時の純文学にそんな書き方をする人はいなかった。こういう軽い乗りの書き方は、80年代的です。けれども、内容的には、意外に重たいテーマを扱っているんです、本当は。小説の筋を無視して、テーマだけ言ってしまうと、これらの小説を通じて、人間が何かひとつのもののために競争し合う、人を蹴落とす、そういう生き方ってちょっと浅ましくないか。自分はそうやって人を傷つけることに何かうしろめたいものを感じるよみたいなことを考えているわけです。まあ、明らかに競争の勝ち組であるエリート学生が言うのもどうかなと思うんだけれども、しかし、そういう葛藤から逃げたいというようなことがテーマになっているわけ。そういう葛藤がある以上は、たとえ勝ったとしても、勝つことによって何かもっと肝心なものを喪失してしまう、ということがあるからです。こう考えると、作者の庄司薫が、四部作のあと、ほとんど作品を出さなくなったことにも必然性がありますね。競争に伴っている「喪失」を避けたければ、公の場で競争することそのものを避けるしかない。何かこの世の中で意味あることをやる、ということは競争することでもあるわけだ

から。

となるのは、よく考えてみると、「理想の時代」だからですね。この時代、1970年代前半ぐらいまでを「理想の時代」と私は呼んでいます。ひとつのコンセンサスとしてみんなが目標としている理想の人生があって、はっきりと見えていた時代ですね。そのような、理想を目指すと、人と競争せざるを得ない。すべての人が到達できることは理想にならないわけです。理想というのは少数の人しか到達できないから理想になるんです。そういう理想を求める生き方に疑問を感じてしまった青年を描くことが庄司薫の小説のテーマだった。それらは理想の時代に、つまり70年代にピリオドをうつ小説だったわけですが、文体の面ではともかく、内容的には80年代を先取りするものではなかった、ということになる。

80年代に入ると、たとえば村上春樹『1973年のピンボール』(1980年)みたいな小説が出てくる。1973年に国内に入ったピンボールマシンをただ探しまわる、ちょっと幻想的な小説なんですが、70年代と比べると、すっごくくだらないことをやっているんですよ、主人公が。だって、そんなゲーム機なんて、べつにどうってことないじゃないですか。どうみてもつまらないものをわざと一生懸命探しまわることで、何か大義とか理想とかといった重要そうなものを追求していた70年代までの人たちを相対化して、彼らに対して、距離をとっているわけです。これが80年代ですね。庄司薫の作品が、理想を喪失すること、あるいは積極的に放棄することを小説にしたとすれば、村上春樹の『ピンボール』は、失った理想の空所に、理想とは真逆のくだらないものを代入する小説、ということかな。

成田さんの話との関係で言えば、80年代は「サヨク」が出てきて「左翼」が少しずつ相対化されるんだけれども、まだ左翼が偉かった最後の時代ですよね。90年代になると左翼はちっとも偉くない。80年代までは、まあ偉かった。

斎藤 ちょっとね。頭よさそうだったから。

大澤 そう。普通に賢ければ左翼にならざるを得ないと思われていた。そういう意味では私たちは全員左翼ですよね。左翼というだけで一応最低限偉いと言うことができる時代が80年代だったんです。それ以降になると左翼はかっこ悪いものになる。ネトウヨは右翼じゃない、左翼嫌いですね。わざわざ「嫌い」とネットで言われてしまうくらい、左翼はかっこ悪くなってしまった。

いま思い出しましたけれど、『見栄講座』って徹底していて、著者たちが嘘の経歴をつけているんだよね。

斎藤 はい。本当は成蹊なんだけど、「米マサチューセッツ工科大学を首席で卒業後、ハーバード・ビジネス・スクールに三年間学び、見栄ライフ・スタイルの概念を生み出した……」とある。

大澤 それを真に受けて取材に来た朝日新聞の記者がいたらしい(笑)。あの当時は格好をどうつけるか、見栄をどう張るかということをやるんだけれども、他方で、その見栄の背後にどんなにあからさまな恥ずかしい現実があるかみたいなことを言うことがちょっと流行っていましたよね。『ANO・ANO』にしても『金魂巻』にしてもそういうところがあります。

斎藤 批評的なんです。

大澤 そうですね。ちょっと自分自身に対して距離を置いて、自分を冷笑的に見たりすること自体がかっこよかった。さっきの林真理子も初期のエッセイでいかに自分が下積みしているかということをはっきり書いちゃう、そういう感じでしたね。

『なんクリ』とカタログ文化

成田 もう少し『なんとなく、クリスタル』にこだわってみたいと

『なんとなく、クリスタル』は、（中略）１９８０年に出ているので70年代後半の風俗ということになっていたんだけど、そのあとむしろ80年代が『なんクリ』を追いかけていったような感じがありますよね。（斎藤）

は今のようによく知られてはおらず、一つ一つ注がついている。たとえば主人公が使うお店の名前に注がふってあるのです。ちなみに、私はその当時主人公の行動範囲内に住んでいましたが、登場する店は、どれ一つとしてわからなかったことを記憶しています。（私が遅れていた、ということもありますが）それほど最先端の場所を、注をふりながら描くという小説でした。新しい都市の生き方を若い世代は始めるぞ、という宣言（あるいは報告）として読むことができ、実際そのようになっていったと思います。そして、そのことが大澤さんの挙げられた庄司薫と同じ軽い文体で書かれている。庄司薫の場合はそれでも大義があって、大義の重さを投げ出すということを軽い文体で書くのですが、田中康夫の場合には大義がそもそもない。それまでの重厚長大から軽薄短小へ、否定の時代から肯定の時代、軽みの時代に入っていくことを象徴する作品のように思うのです。

斎藤　『なんとなく、クリスタル』は、小説と注がボケとツッコミの関係なんですよ。小説はボケなので、青学の女性はモデル、男性はミュージシャンという設定ですね。１９８０年に出ているので70年代後半の風俗ということになっていたんだけど、そのあとむしろ80年代が『なんクリ』を追いかけていったような感じがありますよね。私は実は田中さんと同い年なんですが、その当時、『なんクリ』の男性のほうが通っている大学で学生生活を送っていましたけれど、もうすでにすごいブランド大学でしたから、その中ではついていけなくてこんなふうになってしまい（笑）、お嬢様大学の恩恵はなにも受けずに卒業しちゃったんですけど、そういう女の子たちがすでに思うのですが、これはとにかく売れたのですね。斎藤さんの言葉で言えば、ギャラリーは多かった。おそらくは成城大学に通っている男性と青山学院に通っている女性の同棲中でのやりとりを書いている、それだけのことですが、青山や代官山や西麻布といったファッショナブルな場所がたっぷり登場してきます。だけれども、それら

いたっていうのは事実ですね。

カタログ化ということでいえば、『なんクリ』にもいろんなブランドやお店の名がいっぱい出てくるわけですよね。それらはもう五年後ぐらいにほとんどなくなっちゃった感じですけど、『見栄講座』も『金魂巻』も確かにぜんぶカタログ文化ですよね。そして現代思想もカタログ化していく。でも、私はカタログって意外と大事だと思っていて、今の思想状況がどうなっているかとか歴史的な経緯とかわからなくなってしまっていますよね。それはきっと、90年代以降、カタログもマッピングもないからだと思うんですけどね。

大澤 先ほど江藤淳だけがこの小説を評価したって言ったじゃないですか。なぜ江藤淳が評価したのか、当時から謎なんですね。江藤淳がいちばん嫌いそうな小説なのに。

斎藤 江藤淳は『なんクリ』は評価したけど、村上龍『限りなく透明に近いブルー』(1976年)は否定したんですよね。

大澤 そうそう。普通に見ると、『限りなく透明に近いブルー』のほうがよっぽど文学的な感じがするにもかかわらず、です。でもね、江藤さんの評価は率直に言うと、田中康夫についての誤解に基づいていると思うんです。田中さんは、ある意味で、何も考えていないと思う。つまらないことをうじうじ考えるよりその方がよいと思いますが、とにかく何も考えていない。その考えていない状態が、江藤さんの観点からは、なかなかよく見えてしまう。

80年代というのは、戦後史の全体の流れで見ると、今振り返ってみるとですけれど、日本が戦争に負けた、そういう戦争があったということが真に忘れられた時代だと思います。敗戦の痕跡が本当の意味でなくなった時代。そのなくなり方のひとつが『なんクリ』に表れているんですけど、それを逆から見てしまうと、江藤さんのように立派に見えてしまうんですね。

どういうことかというと、こういうことです。江藤さんはむしろ敗戦ということに非常にこだわった人ですよね。アメリカに対する関わり方が、『限りなく透明に近いブルー』と『なんクリ』では大きなちがいがあるというのが江藤さんの感覚なんです。『限りなく透明に近いブルー』は基地文学だから、どこか反米左翼的な雰囲気があるわけですよ。江藤さんももちろん、反米ですからね。だからむしろこちらを評価しそうに見えるんだが、江藤さんは評価しなかった。なぜか。それはよい反米ではないからです。それはこういう感じです。

たとえばですよ、ドラ息子がいて、経済的にも精神的にもお父さんに一〇〇パーセント依存しているけれど、反抗期になってお父さんに反抗するじゃない。お父さんの金で遊びまくって、いろいろ迷惑かけて、どっかで事件起こして、警察に捕まるとお父さんが出ていって「息子が申し訳ないことを…」とか言って、実はお父さんは町の実力者なので警察に顔が利いてね、息子の非行をぜんぶ揉み消してくれる。すると、客観的に見ると、思いっきりおまえが反抗できるのはお父さんのおかげだぞ、となる。その反抗自体が、お父さんにいかに甘えているかということの表れになるわけ。そういう感じを『限りなく透明に近いブルー』に受けるわけ。

斎藤 なんと斬新な……。

大澤 いかに反米に見えても、おまえアメリカに思いっきり依存してるじゃないか、こんなふうにいきがってなんだ、となりますね。いっぽう、『なんクリ』には、そのようにアメリカに依存していることからくるドラ息子的な屈折がまったくないわけですよ。ブランドもののように、アメリカ的というか西洋的というか、そういう世界を、屈折を介さずに受け入れていくわけです。依存しながら反抗しているやつよりは、ちゃんと自分が依存している状況をひきうけ

ているやつのほうが、江藤さんには立派に見えたわけでしょう。本当はアメリカに依存していて、反抗できるのも実は依存しているからなのに、まさに反抗しているがゆえに、自分はそこそこ自立していると思っていると錯覚している人よりも、依存の事実をまっすぐ見据えて引き受けている人の方が、自立の程度が少し高いじゃないですか。

でも、きっと実態は、アメリカへの依存とかアメリカからの自立とか、そんなこと、単純にどっちでもよくなっちゃっただけなんだけど、田中さんの立場からすれば。つまり、アメリカに負けてアメリカに依存した生活をずっとしている――今でもそうですけどね――そのことを思いっきり忘却していられるのが『なんクリ』なんだけれども、江藤さんから見ると、逆にそれが、アメリカからの自立への一歩に見えたんですね。

アメリカへの屈折した依存にたいして無関心でいることが、可能になるのが80年代。やっぱり70年代までは――といっても、われわれはみんな戦後生まれですから戦争のことなんか覚えちゃいないんですけれども――、日本社会の中にこの国は戦争に負けたんだと感じさせる微妙な影がそこかしこにあったわけです。高度成長だって敗者復活戦みたいな感じになるわけですよ。せめて経済で追いつけば、敗戦の屈辱もちょっとは消えるかなみたいな気持ちもありますから、経済的な成功にすら、やっぱり敗戦の影が色濃くあったんだけど、80年代になったときに日本人はもうさすがにそのことを忘却することができるような気分になってきた。そういう感じじゃないかと思うのね。70年代までを基準に見ると80年代は蜃気楼のように見えるというのは、そういうことも少し関係があるかなという感じがしますね。

成田　いまひとつ、『なんとなく、クリスタル』の描く世界の見のがせない背景として、経済的な活況がありますね。ただ、議論は単純ではありません。若き日の上野千鶴子さんが、（当時、長銀に勤めていた）経済学者の小沢雅子さんとともに、田中康夫さんを囲み座談会をしています（「ポスト大衆社会をどう読むか」『現代のエスプリ』1987年5月）。80年代を「ポスト大衆社会」と把握し、みなが競い合う差異を横並びのものではなく、階層化として把握しています。「大衆」が分解し、あらたな「格差」が生じてきていることを、読み取ろうとしています。

象徴としての83年

斎藤　80年代を見渡してみると、1983年が大きなポイントとして見えてきますね。たとえば、東京ディズニーランドの開園もこの年。

大澤　ええ。1983年がもっとも80年代らしい年と言ってもいい。先ほども少し触れましたが、私の戦後史の区分――理想の時代（1945年から70年代前半まで）、虚構の時代（70年代後半から95年まで）、不可能性の時代（95年以降）――でいえば、虚構の時代の真ん中です。ディズニーランドはその虚構の時代らしさを典型的に示していますね。ディズニーランドがすごいのは、あの空間が外界からきわめて効果的にシャットアウトされていること。つまり、外界の現実からとてもうまく切り離されている。どこがうまいかというと、「切り離されている」ということを意識しないですむようにできている。だから、閉じられているのに、閉じられていることを意識せずにすむ。ディズニーランドでは、子どもだけでなく大人も「ごっこ遊び」を楽しめるのはそのためです。

開園当初、ちょっと話題になったのが、お弁当持ち込み禁止問題ですね。日曜日にお母さんがお弁当作って遊園地に行くというのが家族の楽しみなのに、それを奪うとはけしからん、園内のレストラ

ンを儲けさせるためか、なんて批判された。でも、そんなケチなことではない。そうじゃなくて単純にしらけちゃうわけですよね。ミッキーだのドナルドだのが踊っている隣で、四人家族が梅干しのおにぎりを頬張っていると。ディズニーランドというのは、虚構の空間で、そんなことはみんなわかっているのだけれど、そのことをみながら、あえて「言わない」ということで、虚構の空間の虚構性を、判断停止的にというか、カッコに入れるふうなかたちで自覚的に忘却して、みんなで虚構に、この時間だけ没入しようよ、というお約束で成り立っている。持ち込まれたお弁当のように、あからさまに、虚構ではない、外部の現実とつながっている事物が現前しちゃうと、「ここはただの虚構だぞ」と大声で言っている感じ、つまり裸の王様で「王様は裸だ」と言っている感じになっちゃうわけです。

ともかく、虚構の時代における、虚構の空間の自立性をいちばんよく表しているのが、ディズニーランドなんですよね。

成田　浅田彰『構造と力』も83年ですね。

大澤　そう。「おたく」という言葉もこの年に作られたと言われていますし……。『構造と力』は左翼の最後のバイブルと言ってもよいと思いますが、この本は実は『見栄講座』的に使われたんですよね。つまり、それなりに難解だから、きちんと読んでいる人はそんなにたくさんはいない。読むよりも持ち歩く。持っているだけでかっこよかった。

斎藤　『見栄講座』も奇しくも同じ年です。

成田　なるほど。70年代までのある種の手触りや実体感からギアチェンジが入ったのが83年という感じがしますね。戦争を手掛かりにしながら紡がれてきた戦後思想が、現代思想なるものに変わっていく。マニュアル化というと言い過ぎかもしれませんが、チャート図で思想が解説されていく時代になった。その象徴的な書物として『構造と力』がある。

大澤　浅田さんといえば思い出すのは、1997年に京大に赴任したときに、新入生向けの講演会のようなものに浅田さんと一緒に出たんですね。浅田さんを慕っているというか、浅田さんに憧れている学生たちが主催したもので、浅田さんと一緒に出てくれ、と誘われたんですよ。その講演会でびっくりしたことに、浅田さんの話は『構造と力』のダイジェストだったんですよ。もう一四年経っているのに、まだ現代思想入門はこの本か、と思った。それだけ思想は停滞していたのかもしれないですね。

斎藤　90年代まで通じて……

大澤　そうです。その意味でいえば、『構造と力』のいちばんの主役はジル・ドゥルーズですけれど、最近いちばん読まれた思想書は千葉雅也さんのドゥルーズ論じゃない（『動きすぎてはいけない』）。もちろん浅田さんの本とは観点はだいぶちがうんですけど、80年代にメインで登場していた人がまだ主役を張っている、三〇年ぐらい経っているのに。もっとも、三〇年間、ずっと出ていたわけではなく、やや休眠的な期間もあったわけですけど。

成田　それまでマルクスが大きな枠組みだったけれども、それが構造主義に組み替えられていく。構造主義はあっという間にポスト構造主義になりゆくわけですが……。たとえば上野千鶴子さんも構造主義から出発をしているんですね。『セクシィ・ギャルの大研究』は『ANO・ANO』的な素材を扱っているわけですけども、その分析の構えは構造主義でした。それらが、ドゥルーズ的に言うと、根っこ（リゾーム）を持ちながら集まってきてひとつの潮流を作っていったのが80年代ではないでしょうか。

斎藤　「脱構築」という言葉も流行りましたよね。つまり、関節をはずしていく。『金魂巻』でも『見栄講座』でも『現代思想・入門』

でも、みんなそうなんですよ。今まで肩に力を入れて「勉強しなければいけない」、「人生こう考えなければいけない」、「世の中はこうでなければならない」って言ってたのが、「そんなのどうでもいいんちゃう？」っていう感じになる。だけど、「どうでもいいんちゃう？」と言いながらそれをぜんぶ捨て去るわけではなく、見方を変える、足元で威張っていそうな奴をこかすみたいな――すごい雑なとらえかたですけれども――運動の仕方は展開されていた。浅田さんで言えば、『逃走論』（1984年）のほうが私には面白くて、要するに今までの肩肘張ったようなものではなく、これからの「スキゾ・キッズ」はそのときどきで陣地を変えていくんだという思想の持ち方が出てきて、しかもそれがずっと続くと思えたんですね、80年代は。

敗戦の事実の抑圧

斎藤　そのいっぽうで、この頃、教科書問題のような問題も出てきた。

成田　正確に言うと82年から始まりますが、当然のことながら「関節はずし」では済まない問題があるわけです。歴史認識問題と現在いっているものの始まりが実はこの時期ですね。ご承知のように日本の学校教科書は文科省の検定を受けないといけないのですが、この82年、（広義の）アジア・太平洋戦争について「日本が中国に侵略をしました」と記したところ、検定で「進出」と書き換えさせたため、中国、続いて韓国が抗議し、そのほかシンガポールやマレーシアからも抗議の声が上がりました。今まで日本国内の問題だった検定問題が一挙に外交問題、政治問題として浮上したわけです。結局、「侵略」の記述を復活させ決着させますが、これ以降、教科書検定には近隣諸国条項が付くんですね。つまり対外的な配慮をしないといけないということになる。国内の議論とアジアの議論との差異――過去と現在の認識の温度差が見えてきた瞬間です。それを今度の安倍政権は見なおそうとし、大きな問題になりそうですが、そうしたとんがった問題もあった時期です。

大澤　「侵略」を「進出」に置き換えてしまえというのは、先ほど言ったこととも関係があって、やっぱりこの時代にね、日本人の戦争に対する感覚が変わろうとしているということと関係していたと思うんですよ。どう変わったか。日本人の心性に、戦後一貫した傾向がある。それは、「できることなら敗戦はなかったことにしたい」ということです。だから「敗戦」というよりは「終戦」じゃないかと、思ったりする。

　敗戦をなかったことにするには、究極的には、戦争がなかったことにしなきゃだめですよ。うんと率直に言うと、日本人としては、「中国と戦争して中国に負けたということはなかったことにしよう」と、そういう感じにしたいんですよね。そうはいっても70年代ぐらいまでは戦争の事実は否定しがたいですね。やっぱり日本は中国を侵略し、朝鮮半島を植民地化し、そしてあの悲惨な戦争で負けたっていうことを完全には否認できなかった。でも、80年代になると、否認してもよいような感覚が出てくる。「あれは『進出』だろ？」と、ご近所が出かけてきたみたいな話になったのです。そう言ったら、土足で家に入られて、乱暴狼藉をされたご近所の側から、ふざけんじゃないよってことになってしまった。

　さすがに、アメリカとの関係だと一応負けたことを認めざるをえない。でも、少なくとも、アジアとの関係では負けたことにしたくない。だから今でも日本人は、アジア諸国からなんか言われると異常に腹立っちゃうんですよ。向こうは侵略してきた日本に対して戦勝国としての立場でモノを言っている。けれども、日本側は負けた気持ちなんてないんでね。だから、相手が勝者として振る舞うと、日

本人はほんとに腹が立ってしまう。そういう構造ですね。このように、「敗戦の事実の抑圧」というものが一段レベルアップしたのが、あの時期じゃないかと思うのね。それまでは、敗戦の否認や抑圧をしようとしつつ、そうしていることに対して後ろめたさがあった。その後ろめたさを感じなくなり始めたのが、80年代の初頭。

成田　そういう目で改めて『見栄講座』を見てみると、結びのほうにこのような一文があります。「明日の日本をますますだめにしてくれることを、おじさんは祈ってやみません」。これ、とても意味深長ですね。基本的に今の社会を肯定して、その中をすいすい泳ぎきっていくことを教授しているように見えながら、体制に対するシニカルな姿勢も併せ持っている。なかなか一筋縄ではいかない、見栄講座です。浅田彰の『逃走論』にしても、大義を背負わず逃げると言いながら、問題の存在は自覚しながら逃げている。ですから、中国あるいは韓国から戦時―戦後の認識をめぐって批判が出されたとき、正面から受け止める姿勢―感性もあったと思います。

大澤　それまでの日本人はやっぱり国のためにという使命感を持ってやるところがあるんだけど、この時代になるとそんなのはちょっとダサいわけですよ。そんなのは、浅田さんの「スキゾ／パラノ」の構図でいえば、パラノ。何かに執着する『巨人の星』みたいな生き方でかっこ悪い。それに対して「なんちゃって、そんなことどうでもいいじゃん」みたいな感じで『なんクリ』のように生きるのがスキゾですよね。だから、『見栄講座』も「明日の日本をだめにしたっていいや」みたいなことを言う。でもね、そういう言い方をするときにはある種の安心感があるわけ。つまり、日本はもう十分一流に近いんじゃねえかっていう気分ですよ。だからそんなこと言えるんですよ。本当にだめだと思っていたらなかなかそんなこと言えないですよね。『ジャパン・アズ・ナンバーワン』というエズラ・ヴォー

80年代って、蜃気楼のような時代というか、本当にあったのかなかったのかよくわからないみたいな感じがするわけ。よく「失われた一〇年」と1990年代のことを指して言いますよね。なぜ90年代が失われて見えるかというと80年代を基準に考えるからですよね。（大澤）

ゲルの本が出たのが1979年だったと思うんですけど、「なんか他人からもナンバーワンとか言われちゃってさ」みたいな……。

斎藤　それはそれは驕ってましたよね。中曽根首相なんかの当時の演説を読むと、あの本を丸写ししているんじゃないかという感じでした。

チェルノブイリと反原発運動

斎藤　話は変わりますが、チェルノブイリの原発事故が86年に起こるんですよね。実は私の80年代って反原発マイブームだったんです。79年にスリーマイル島の事故があったので、ちょっと先の思想の持ち主はみんな反原発にいくんですね。だから、3・11のあとに「初めて原発のことを考えるようになりました」という人たちがいましたけれど――若い人たちはいいですよ、だけど五〇代以上でそういうやつって、80年代どうやって暮らしてたんだって、私には信じられません（笑）。逆にそのくらい流行りだったの、反原発が。実際に原発で働いた経験をもとにした堀江邦夫『原発ジプシー』が79年。広瀬隆さんの『東京に原発を！』がベストセラーになったのが81年。私は80年に大学を出たんですけど、広瀬隆さんがやっている反原発講座に通ってたんですね。

成田　旧来の左翼は、労働組合をはじめとする組織に依存し運動をしていました。それに対して、新しい社会運動が60年代後半に登場してくるわけですね。ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）のような運動スタイルです。斎藤さんが言われた反原発運動もそうした運動の流れに位置しています。地域の人たちが独自に自発的に参加し、学習をしながら運動を作っていく、新しいタイプの運動ですが、こうしたサヨクの運動の可能性も80年代は秘めていたし、大きな潮流になるはずだったということですね。確かに、原発が安全なら東京に作ればいいじゃないかという広瀬さんのメッセージは衝撃的でしたし、3・11のあと絶えずその名前が呼び戻された高木仁三郎さんも80年代の重要な思想家であり運動家でした。

大澤　80年代のそうした運動は、労働者というものに足場を置くよりも、生活者・消費者としての立場を経由して出てきていますよね。原発に依存して生活している生活者としてどうなの？という問いかけですね。

斎藤　当時はそうした気運は結構あって、その挙句のチェルノブイリなんですよ。だから、いきなり起こったというより、「ほら言わんこっちゃない」っていう感じがすごく強かったんです。ただ、やっぱりソ連で起きたってことが大きくて、情報が出てこない国というのは当時ありましたから、いちばんやばいところで起きたという印象でしたね。

成田　当時の新聞を見ると、事故の情報は、最初はスウェーデンから入ってきているんですね。ソ連当局の発表ではなくて……

斎藤　今から思えば、ソ連の崩壊もあれをひとつの引き金として、根底が揺らいだ。原発事故は国を滅ぼすんです。

大澤　もちろん、ゴルバチョフ自身はソビエトを解体するつもりなんか、まったくなかった。むしろ、ソ連を延命させるためにこそ、ペレストロイカをやったわけです。しかし、結果的に彼が意図していた以上のことが起きてしまい、ソ連は消滅して、ゴルバチョフは失脚した。長い目で見れば、ソ連の解体はひとつの歴史的必然ですけれども、あのタイミングで原発事故が起きたってことは、やはりソビエト崩壊への非常に大きなきっかけにはなりましたよね。ゴルバチョフ自身、自分のペレストロイカよりも、チェルノブイリの方がずっとインパクトが大きくて、ソ連崩壊の最も重要な原因となった、と後で述懐しています。チェルノブイリ事故あたりから、冷戦の崩壊の過程というものを捉えておく

必要があるね。

ユーミンと堤清二

成田　話が80年代の終わり、冷戦崩壊までたどり着きましたが、さらにいくつか、論点を挙げてみましょうか。

斎藤　私は80年代に重要な役割を果たした人物として、松任谷（荒井）由実を挙げたいですね。たとえば、蓮實重彦さんが文芸評論の脱構築をやって、上野千鶴子さんが女性解放思想を脱構築して次の時代を作りましたが、ユーミンは70年代的な四畳半貧乏フォークを脱構築して、80年代的ワンルームポップスの時代を作ったのが彼女。最近、酒井順子さんが『ユーミンの罪』という本を書かれていますね。酒井さんのように60年代以降に生まれた人のほうがより影響を受けていると思いますが、人びとの世界観がすごい変わったというのは彼女のようなポップミュージックにいちばんよくあらわれてくると思います。自分で詞を書き自分で歌う人たちは70年代ぐらいから出てくるわけですけれども、彼女が80年代に良くも悪くも巻き散らかした生き方のスタイルは、功罪はあるかと思いますが、とても80年代的だなって思いますね。87年に俵万智さんが『サラダ記念日』というベストセラーになった短歌集を出しましたけれど、言葉遣いとか世界観とかがすごくユーミン的だという印象を受けましたね。

成田　ユーミンは、本当に息の長いシンガーソングライターですね。70年代初めにデビューし、80年代90年代を通じて活躍し、いまだに現役です。荒井由実として私などは接したのですが、70年代半ば以降は松任谷由実ですね。彼女のどの部分、どの時期を軸に捉えるかということも、80年代理解にとても大きく関わってくると思います。

斎藤　中島みゆきと二大巨頭ですよね。同じ世代で70年代からずっと活動を続けて今も現役ですし、80年代の世界観をそれぞれ代表する女性シンガーソングライターだと言えると思います。方向性は逆ですが、ふたりとも歌詞の力で視聴者の心をつかみました。

大澤　私は堤清二を挙げますね。80年代は西武百貨店の時代ですよね。もともとそんなにたいしたデパートでもなかったのが売上げトップになるわけですよ。渋谷にパルコが進出したのは73年ですけれど、一気に花開くのが80年代。

成田　堤清二さんも、80年代的な要素とともに、辻井喬として「戦後文学」を綴る顔とを併せ持っていますよね。

斎藤　「おいしい生活」（1982年）とか「ほしいものが、ほしいわ。」（1988年）といった糸井重里さんのコピーに象徴的な世界ですよね、西武って。

大澤　これまで語ってきたような80年代的な世界を実業界で表現していたのが堤さん。堤さん自身はもうちょっと多面的というか、もともと左翼、共産党員だったりして、本人の意図とはちょっとちがう世界が展開しちゃったんでしょうけど。

だから、80年代は二面性があるわけですよ。スキゾ的な面とパラノ的な面と言ってもいいですが。たとえば『見栄講座』のように軽くいきましょうとか言いながらそれを実現するには結構ヒ的な生活を送らなきゃいけないみたいな、土臭いことは実はあるんですよ。表ではできるだけ格好つけて『なんクリ』の世界で生きているみたいにやっているんだけれども、裏では昔の努力家風の部分がある。そういう部分はかっこ悪いから、消費社会の中ですべてを相対化して、なんちゃって、と。

斎藤　ふりをするんですよね。

大澤　そうそう。

斎藤　裏ではすごい土着かもしれない。

大澤　その二面がある。松任谷由実的側面と中島みゆき的側面とも言い換えられるかもしれない。そういう二面があるけど新しく起きているのはどっちかっていえばス

キゾ的な側面だからね。80年代は、世界はやがてそういう軽い世界になっていくんだろうと思っていたんだが、90年代になってみると実は土臭いところだけが残るみたいなね、逆の感じになるんです。たとえば、年功序列・終身雇用みたいなかっこ悪さを捨てて、自分の好きなように逃走論的に自由に動いている人なんていうのは、ある意味パロディ的なかたちで、現在に回帰しているわけですよ。自由といえば自由だけど、気づいたら、今で言えば、結局は非正規雇用ですかみたいなのが、それです。これは、形式的には、まさにスキゾの基準を満たしていて、まさに逃走しているわけですが、当初想定していたものとはちがって、ちっともかっこ良くない。

斎藤　バブルの頃って――当時はまだそういう言葉なかったですけど――フリーターってかっこ良かったもんね。半年間だけバイトして半年間海外に遊びにいっちゃうとか、そういう友達いっぱいいましたから。

大澤　最初はかっこ良い生き方として使われたんだよね。その気になれば仕事はありますよという余裕ある状況を背景にしていたわけだけれども、いつまでもそうはいかない。

成田　組織に縛られない生き方をするという生き方が、ワンサイクル回ってみると――それが普通のかたちになってしまうと――逆に生活の基盤を失うことを意味するという状況ですね。

おそらく堤清二さんは、そういう資本主義の矛盾を見つめる目を持っていた人だったと思います。西武グループの総帥として、パルコを母体にしながら今までの流通のあり方を変え、斎藤さんの指摘にあった糸井重里のコピーに表れているように、モノを売る以上にイメージを売る戦略をとり、渋谷の街をパルコを中心にして西武のイメージで作り変えていきました。そのいっぽうで、辻井喬として、詩人であり作家でもあったわけです。かつては共産党に入って左翼活動もした。もちろん漢字の「左翼」です。資本主義の拠点である西武の社長として資本主義そのものを変えていく実践をしながら、そういう自分の営みを絶えず相対化して冷静に見据えていたのですね。西武が破綻したときには私財をなげうって決着をつけ、あとは辻井喬として生きていく、そういう堤清二の生き方そのものが、大澤さんが言われた二面性を示していると思います。

「なーんちゃって」の世界

大澤　よく「80年代的」といいますが、70年代の後半から90年代の前半ぐらいまでは80年代的なんですよね。だからブローデルの「長い16世紀」風にいえば「長い80年代」。そう考えるといいと思うんですね。ちょっと面白いと思うのは、現在の日本人が過去にノスタルジックに回帰するときに、80年代に回帰することはあんまりなくて――映画『バブルでGO!!』（2007年）みたいなものはありましたけれど、これにはどこか「おふざけ」だというような自己相対化があるので除外しますと――たとえば昭和30年代ブームみたいになるわけじゃないですか。つまり80年代はどこか本物じゃない感じがあって、本当に回帰するなら昭和30年代かなと、80年代よりもはるかに前に回帰するわけです。やっぱり80年代というのがある意味でちょっと浮いているわけですよね。我々がいま直面している問題がなかった「幸福な時代」というものを考えようとすると、80年代はスキップされてそれより向こうの時代にどうしても幻想を――もちろん幻想なんだけれども――投影してしまう。このことが80年代という時代が何らかの意味で浮いていて、非実在的だということを如実に示していると思います。だから、80年代に極端に流行ったもの、80年代的すぎるものを取り上げるのは、なかなか難しい感じが

することがありますね。

成田　とても重要な指摘ですね。

斎藤　80年代を知らない人でも、まずバブルというものがあったらしいぞ、羨ましいなあというのはあるんだと思うんですね。ただ、それって80年代の終わりぐらいの話で、必ずしもバブルでぜんぶ言えるわけじゃない。

　ただ、今思うとバブルの恩恵はありましたね。あんまりなかったけれどありました。やっぱり仕事は降るようにあったし、一二時ぐらいまで仕事をして、それからお酒を飲みにいって、街じゅう開いていましたから渋谷なんて夜中じゅう。で、三時、四時ぐらいまで飲んで朝帰って寝て、お昼ぐらいに出ていってまた仕事するみたいな……すごくバブリーでしょ？そういうことはあったけれどそれはあくまで一面ですよね。

大澤　確実に言えるのは、80年代はみんなだんだん金持ちになるというふうには想定していた。

斎藤　こんなふうになるとは思ってなかったですよね。

大澤　80年代は、大卒初任給をもらうと、これが自分の一生の所得のボトムであると想定できましたよね。それ以上に増えるに決まってると思っていた節がありますけど、今はね、せいぜい現状維持。もちろん年齢が上がると多少上がるでしょうけど、しかし全体としてより金持ちになるという想定はあまりないでしょうね。親の資産も目減りしていくし……

斎藤　少子化で国力も低下していく……

成田　だんだん今は暗いという話になってきましたけど、80年代も必ずしも明るい時代ではなかったですよね、同時代を生きてきた感覚からいうと。

斎藤　貧しかったですよね、とはいえ。『見栄講座』とか言ってるから当時の若者が金持ちかと思ったらぜんぜんですよね。だってトイレ共同、四畳半アパートみたいところに住んでいたのが普通ですから。キッチンもないお風呂もない、当然銭湯に行くのが前提でした。そういうものがバブルのときにぜんぶ失われてしまって、若い人たちが一からやり直す――家賃二万円ぐらいの四畳半アパートから自活を始める――ことはできにくくなっていますよね、今ね。

大澤　だから、まあ、「なーんちゃって」の世界ですよ（笑）。

成田　80年代は、戦後的なものがポスト戦後的なものに変わっていく時期であるわけですが、しかし〈いま〉からみたときに、状況はもう一回転まわってしまっている。たとえば、片づいたはずであった貧困問題が今もう一度眼の前に登場してきてしまっている。80年代には貧困などもはや世の中からなくなったかのように思われ、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」、「一億総中流」、「経済大国」などと言われたけれども、気づいたらそのような基盤は失われてしまっていた。

　それがゆえに、80年代にいろいろと紡ぎ出された思想や文化が、現在の状況の中でもう一度その意味を問われていると思います。逆に言えば、80年代を鑑（かがみ）にすると、〈いま〉がいったいどういう状況なのかということがとてもよく見えてくると思います。今回のお話はその問い直しのきっかけになったのではないかと思います。ありがとうございました。 ⓑ

二〇一四年五月一八日、かわくらシンポ
「なんだったのか、1980年代」
エスパス・ビブリオにて